

茶の湯文化学会会報 No.79

第79号 / 2013年12月26日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「訪中団に参加して」

瀬戸 元

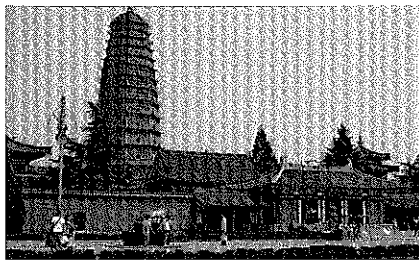
研究会初日は法門寺と法門寺博物館で広大な土地と新しい巨大な建物・仏像群に驚かされる。バスを降りて目的地に着くまでに小一時間を費やす。特に私は金の宮廷茶具、秘色瓷（唐代の越窯・耀州窯青磁）、瑠璃茶碗、茶托に心惹かれた。金銀糸結条籠子の精密美麗な細工、壺門高圈足座銀風炉の形状と板金技術、鍍金壺門座銀茶碾子は端正な形で茶葉の碾子と分かる。鍍金人物面銀壇子の精巧な文様等には感激した。ただ残念なことには、目玉の特別展観の珍宝館地下は暗くて秘色の色が分からなかった。亦面白かったというより、さもありなんと思っただけは、佛舍利骨は本物一個に対し、三個のイミテーションが造られ、その容器は素晴らしく、一番地味な容器に本物が納められていたことである。

午後は、私の第一の目的の咸陽涇渭茯茶工場に遅れて着いた為、顧雯先生が事前に打合せの上準備されていたスケジュールが崩れ申し訳なかった。早速紀曉明所長より茯磚茶の歴史・復元の経緯・工程・特徴につ

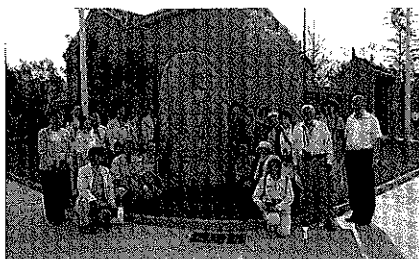
第三十六回研究会報告

瀬戸 元
黒澤 節子

いて講義を受ける。所長は咸陽の地に茯磚茶を復活させ、併せて茯磚茶の茶文化も広げようと明確な目標を持っていて、「茯磚茶賦」・「茯茶の歌」等も創る文人所長である。この茶の魅力は、夏の安い茶葉を調達し、涇渭という地で、「発花」という工程で「金花」を育てるという付加価値の高いお茶である。討論会は、忌憚のない厳しい内容であったが、真正面から受け止めてくれたようで、安全性の確保を期待したい。民間企業で分析装置も備え研究室を持っているのも好感が持った。私の収集している茶詩に、茯磚茶に関するものを加えられ、実りある研究会であった。



法門寺



咸陽涇渭茯茶公司

二日目は、耀州窯博物館では、祿振西前館長の出迎えて、茶の湯文化学会向けの説明は有難かった。金康銘茶文化街では、もう少し時間をとって街の中を散策したかった。中国茶の茶盤などは使い勝手もよさそうで、種類も多いのに驚いた。大雁塔は昔日の趣きが感じられ、長安に思いを馳せることが出来た。

最終日は白居易の長恨歌にある玄宗、楊貴妃お湯遺蹟、華清池、そして兵馬俑坑博物館と陝西省歴史博物館を参観する。非常に有意義な研究会が出来た裏には、全行程ガイドをしてくれた馮さんを忘れてはいけない。中国・日本の歴史、事柄にとっても博學でユーモアな話術で我々に説明してくれた。企画してくれたタイムトラベルの遠藤さんと一緒に感謝を捧げたい。

「西安研修旅行に参加して」

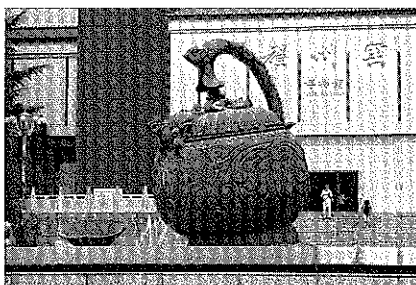
黒澤 節子

今回の茶の湯文化学会の中国研修は西安。法門寺、兵馬俑とありましたので、すぐさま参加メールを送信いたしました。中国における反日感情、PM2.5による大気汚染、夏の暑さも忘れて心は一気に古都西安へ飛んでおりました。

研修一日目。真身舍利を納める寺として知られた法門寺を見学。

偶然発見された地下宮殿にあった唐代の茶道具や秘色青磁を見るのが、今回の研修での私の最大の目的。非公開の地下収蔵庫へ特別に案内され、衣物帳碑やガラスの皿、金糸で刺繍された奉納衣類（上で見たのはレプリカ）等を拝見しました。先生方のつながりや学会の威力（？）で、これ以後も、方々でこのような特別扱いや館長クラスの案内があり、参加の私としてはこの研修旅行のありがたさを強く感じました。

午後は所長の紀さんの案内で咸陽茯茶工場見学。茯磚茶は茶馬貿易の名茶としてここ陝西省涇陽で六〇〇年の歴史を持つ黒茶の一種です。一九五八年に民間の製造が禁止されて工場は閉鎖。生産拠点が湖南省に移されましたが、近年、再びここ咸陽での製造が許可。開始されました。幸いなことに秘伝を伝える技術者が生存していて、その指導が得られたとのことです。昔ながらの釜炒りの実演も伝統製法工房で見ることができました。下から熱を加えながら横に置いた茶の煮汁を入れ、



耀州窯博物館前の青釉刻花倒流壺



鐘樓

へラで茶葉をかき混ぜます。煮汁の分量やかき混ぜ方に秘伝があるそうで、よいお茶を作る条件として「水、風土、人材」が必要、と紀さんが説明してくれましたが、よくぞ名人が生きながらえてくれたものと感謝です。そして茶葉を発酵させ、「金花」というこの土地特有の菌をつけます。茶葉を顕微鏡で見ますと黄色く丸い胞子が付いています。その可愛さに思わず「ああ」と感嘆の声がでるほどです。試飲した茶は、ウーロン茶に似ていますがくせもなくおいしい。最高級の茶葉は一〇〇杯目でも味も香りも変わりないとのことですが、私が買った物では七、八杯まで飲めるとのことでした。

二日目は中国八古窯の一つ耀州窯博物館の

見学です。まずは博物館前の巨大な青釉刻花倒流壺にびっくり。ここに限らず、陝西省歴史博物館のシンボルも重さ二〇トンはある石造の獅子で、中国は何でもスケールが大きいと感じます。ホテルで「すぐそこ」と言われて自由時間に出かけた美術館へも、想定していた距離の少なくとも倍は歩き、館内も広大で見る物が多くて駆け足状態でした。

最終日は、一足早い帰国の関空組を見送り、成田組は西門見学へ。城壁の上から灰色に霞む西の彼方を望みます。どこまでもまっすぐ伸びるこの道は、いわずと知れたシルクロード。今は高層ビルが立ち並び、ラクダに代わり車が走っていました。

西安は地下鉄工事の真最中でしたが、冗談ではなく、まだまだ地下から大発見があるのではないのでしょうか。期待したいです。

平成二十五年大会（続報）

「雑談（ぞうだん）・茶の湯文化学会創立二十周年」より

初代会長 中村 昌生氏

「茶の湯文化学」創刊号の序文「創刊にあ

たって」を読み直していただきたい。「茶の湯文化学」という名称は、広範囲な学問である茶の湯という土俵に、分化していた学問を総合化することによって、茶の湯とは何か、茶の湯の全体像はこのようなものだと言明できるようにすることが目的で名付けられた。散在していた史料の調査が進んだのは学会ができた効果による。だが追たるやいまだ遠し。今後さらに研究を充実させるためには、過去の文化人の著書を読み、それを人に語ることに有意義である。そのような文献研究会あるいは講読会を提案する。私は茶室を、建築としてではなく、茶の湯の道具として終生付き合っていきたい。

二代会長 倉澤 行洋氏

太平洋戦争以前、茶の湯は婦女子の遊芸であり、帝大の学生のすることではないと言われた。現実の世界・学問の世界での、茶の湯に対する評価は低かった。だが学会をつくったことによって、学術としての市民権を得た。学生時代、初めは西洋の思想・哲学を学んでいたが、東洋（日本）のことも両方研究することを決意した。茶の飲用は東アジアが中心である。茶の文化を世界史の中で見たらどのような意味がでてくるのか。東洋と西洋の

文化の間には根本的な違いがある。東方的自然本位主義（ナチュラリズム）文化としての茶を、西方的人間本位主義（ヒューマニズム）との対立の中にさぐっていく。

三代会長 谷 晃氏

茶の湯が成立する要件に①点前②茶道具③茶室がある。この中で点前の研究はなかなか進まなかったが、行われるようになった。流派の比較による点前の研究ができるようになったのは学会があったからで、その存在は大きいと感じる。茶の湯は遊興性が強いが、現実の茶の湯には型があり、点前にも型がある。型は最終的には超越すべきものであっても、最初は型を学ぶことから始めるべきである。そして稽古をしていると型は茶の湯の根幹を成すものだと気づく。芸道・武道を問わず、型をどう伝えるか、教えるかを理論化することはできない。型の意味は、実際にやってみて初めてわかること。そこに宇宙があることを理解するにはさらなる修練が必要である。

O-CHAパイオニア賞受賞について

熊倉 功夫

このたび、茶の湯文化学会が、公益法人世界緑茶協会より、平成二十五年度 O-CHAパイオニア賞 学術研究大賞を受賞致しました。学会二十年の学術活動の業績が評価された結果であります。歴代の会長、副会長はし



め会員全ての努力が認められたもので、誠にめでたく存じます。

世界緑茶協会は平成十八年に任意団体より法人に移行しましたが、その前から静岡県が茶文化振興のために設立したもので、三年毎に世界お茶祭りを静岡のグランシップを会場に開催し、世界から研究者を集めて学術会議を開催してきました。パイオニア賞は個人、団体の諸活動を対象とするもので、当会理事の中村羊一郎氏も以前に受賞されています。この受賞を機に、本学会がめざす茶の湯文化の総合的研究、ここにここに包括される喫茶文化の基底に対する研究がさらに盛んになることが期待されるかと思われれます。

例 会

東京例会

(平成二十五年七月十三日)

「朝鮮半島に視る、茶室の原風景」

井上 慶雪

「河班(李朝貴族)」出自の妻を持つ私は、長年韓国とは関わって来た。そこでおのずか

ら「朝鮮待庵」との邂逅となる。すなわち河班の豪壮な屋敷に連なった一屋に、この「待庵(もく)」がある：：そしてこの小部屋の狭い引き戸の前には、茶室・欄口の踏石にまがう沓脱石が置かれ、その住人は此処から出入りする。またそれは両班貴族の住む母屋と一線を画した、身分の低い者達の住空間であり、たとえばその屋敷に関わる執事とか秘書など

使用人の事務処、もしくは病人を抱えた屋敷の専属医師が薬師の常駐部屋：：しかも朝鮮半島の極寒の冬を凌ぐ床暖房の熱効率を高めるために、いずれの部屋も二畳敷強で天井も低く、土壁を塗り廻し出入口も極度に狭い空間に座して炬を切れば、即「待庵」である。かかる小文で要約するのは極めて困難ではあるが、この目的も異なる朝鮮半島の住居の存在を何らかの形で千利休の許に齎せられた時、利休の見立てでそれが「待庵」になったことは不自然ではない。問題は、朝鮮半島の文化的情報が如何にして利休の許に齎せられたのか：：私はその鍵を、利休に近侍した楽長次郎を座長とした朝鮮工房に置いてみた。勿論、長次郎を中国渡来人とする説も多いのであるが：：先般NHKが放映した「四百年の宿命を背負った男・楽家当代」のDVDを

三人の韓国の有識者に見せたところ、《鍛冶師の仕事場に似ている：》から、映像中「黒楽茶碗」を焼成する窯が包丁鍛冶の炉と同じだと言う所感が帰って来た。登り窯ならぬ、「楽茶碗」の焼成の独自性を見るにつけ、「長次郎工房」の金属加工と陶磁器焼成の技術の互換性が兼ね備えられていたのではないだろうか：一方大工や調度師のグループからは、朝鮮半島の住居の青写真が描かれ、利休は狭い出入口を持つ閉鎖的な空間に、茶室へと模索する止揚を追い求めていたのではないだろうか：すなわち利休と長次郎との間には、朝鮮半島文化の顕在化がそこに共生していたのではないだろうか：

天正十年、「山崎の合戦」で勝利した羽柴秀吉は天王山々頂に城を築かせ、利休にも茶室を造るよう命じた。そこで利休は密かに温めていた「朝鮮待庵」の原型、すなわちぎりぎりの二畳に縮めた茶空間に狭い「くゞり戸」を設え、そこから秀吉を潜りて入室させ、茶の湯の平等化を計る「一客一亭」の茶事を思い立ったのではないだろうか：すなわち《山崎城の二畳敷き茶室で、筑州殿をお待ち申す》と言う、「待庵」である。

「外から見た茶の湯」

田中 秀隆

戦国時代に来日した西洋は、自身が官廷作法を洗練させていく過程でもあり、まず、東洋の洗練されたマナーに驚く。江戸時代になって、西洋でも喫茶が始まると、茶栽培の秘密を知りたいと考える段階になる。アヘン戦争の結果、清国の門戸を開放し、茶栽培の現場をプラントハンターによって確認した西洋は、茶栽培を自国の植民地でも可能にする。もはや、茶栽培の方法は、知るべき東洋の神祕ではなくなるが、西洋では、ジャポニズムと称される日本趣味の流行の時代が出現する。西洋によつて、蒐集された日本の美術工芸品の多くは「茶の湯」の工芸品である。しかし、工芸品よりも茶の湯に対する関心が低いのはなぜかと、チェンバレンは、「日本事物誌」で「茶の湯」の項目をはじめめる。日本美術の蒐集が増えたことを背景に芸術の国日本を作り出したものへの関心が、「わび」の美意識やそれを生み出したとされる利休への関心を生起させたものであることを確認し、チェンバレンの再評価を行った。

一方、海外への「茶の湯」紹介者の代表で

あるかのような扱ひも見られるモラエスに対しては、茶の湯を本格的に紹介する意図を持つていないことで否定するのではなく、それではなぜ日本人がモラエスを支持したのか？という問いかけを行い、日本文化の独自性をもとめるという昭和初年の知的風土においては、単に茶道関係者だけではなく、多くの日本人に支持される基盤を有していたからだと想定し、外から見た茶の湯は、西洋と日本の欲求、双方を反映しているものであると結論した。

東海例会

(平成二十五年九月二十一日)

「中世から近世にかけての新茶摘採時期の変遷―復元気温からの推測―」

沢村 信一

中世から近世にかけての茶栽培に関する資料は少なく、断片的な記録からの推測に留まっている。また茶の栽培は、気候条件に左右されるため、萌芽や摘採時の気温が重要になる。青野は、サクラの開花や花見の記録から、京都における三月の平均気温を復元した。サクラの開花や茶の萌芽・摘採は、厳冬期からの積算温度で推測可能であり、気温から当

時の茶の摘採時期などを推定することができる。

茶の摘採時期に関して金沢文庫古文書に記載されている三月から、近世の八十八夜への変遷とその理由を以下のように推測した。

「茶経」では「凡采茶、在二月三月四月之間」と、太陽暦の三月に摘採したと考えられる。金沢文庫古文書では、三月末には京都の新茶が鎌倉へ運ばれていた。また、宇治における覆い下栽培の成立に関して、十六世紀前半の極度な冷涼気候が契機となった可能性について考察した。「本朝食鑑」では、新茶の摘採時期は八十八夜を過ぎてからとなつている。このように、鎌倉時代には、京都の新茶が三月末に鎌倉へ運ばれていたのと比較すると、摘採時期の遅延が認められる。

摘採時期が遅くなつた根拠を、復元気温や栽培方法の変化などから、以下のように推測した。十六世紀前半に極度な冷涼気候となり、江戸時代を通して継続した。さらに、十六世紀後半に始まつた覆い下栽培によつて摘採までの期間が遅延したこと、茶の需要が増加したこと、覆い下栽培により摘採時の茶葉が大きく柔らかくなつたことで、これに依えることが出来たことなどが考えられる。

検討する。まず茶を神農や周公に結びつけ、古い伝統文化として権威づけている意図は明らかであるが、漢以前の資料は多くなく、晋代、特に東晋の資料が目立つ。

注目すべきは、陸納と桓温に関する二つの故事で、貴顕が質素なもてなしとして「茶果(茶と果実)」を出したという主旨である。ところが、『太平御覧』に引く資料では、「茶果」を「菜果」に作り、原型の「菜果」を、陸羽が「茶果」と記述したという推測が成り立つ。「茶果」は、唐の天宝年間以降に至つて使用されるが、「菜果」は、「葉物と果実」を意味する古典語である。南北朝時代以前、茶は料理の一部ではあつても、「茶果」で客をもてなすという習慣は確認できない。唐の開元・天宝年間に至り、茶が全国に普及し、「煎茶」「茶果」などの語が発生したことも確認されている。よつて「茶果」の語が東晋で用いられているのは不自然である。

陸羽は唐代の語彙「茶果」を東晋にさかのぼらせ、逆に不快な故事(「蒼頭の水厄」「草曜の故事の後半」「解茗痲」など)は排除し、茶の輝かしい側面のみを強調している。陸羽が茶と結びつけた東晋文化こそは、江南文人文化の原型である。『茶経』の意図どおり、

近畿例会

(平成二十四年十月六日)

「平重盛伝来の箱書をもつ内金張り茶碗

(射和文庫蔵)について」

岩田 澄子

射和文庫(竹川竹斎の創設、三重県松阪市)にある内金張り茶碗は、箱蓋の表に「撰州一ノ谷御所 内金張茶碗」とあり、蓋裏には、平重盛(小松重盛)を筆頭に合計八名の名前が列挙されている。また本体は、外面はこげ茶色、内面は金色で、金の覆輪があるような仕上りの金属製茶碗である。

まず、箱書を通して、平重盛伝承をもつ茶道具(「馬蝗絆の茶碗」「金渡の墨蹟)」について確認した。またこの箱書は、『平家物語』にある平資盛(重盛次男)の逸話と、その末裔が信長と秀吉に滅ぼされたことを示すもので、いわば「伊勢を舞台にした、もう一つの平家物語」を知らせる教材でもあつた(衣斐賢談『昇龍の影』)。

現物調査では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(島津製作所京都本社)で組成分析を行った結果、外面は銅一〇〇%、内面は真鍮(銅七五%、亜鉛二五%)に金メッキを施

したものであつた。

内金張り茶碗は、桃山時代以降に作られた金属製茶碗(大名家に伝承される黄金茶碗など)と比較すると、鍍金(金で引き延ばす)による製法という点では共通する。だが、(1)器形は、直線的に開く斗笠形をしている(いわゆる天目形ではない)。(2)茶碗の外面が金色や銀色ではなく、銅を主成分とするこげ茶色(陶器製の天目茶碗のようにみせかけたもの)、という点では、むしろ、円覚寺に所蔵される響銅(さはり)の碗(鑄造による製法、無学祖元由来)の方が近いかもしれない。

今後、①誰がいつ頃・どこで、この茶碗を作り、②なぜ、重盛由来という箱書が付けられたのか。③中に木枠が入っているか。④類似の茶碗が、出土品あるいは伝世品として現存していないか、について考察していきたい。

(平成二十五年九月七日)

「茶経」研究の課題と展望」

高橋 忠彦

「茶経」が茶文化の形成にどう関つたか考えるため、陸羽が過去の茶文化関係の文献資料を「七之事」として編纂した意図について

茶は唐・宋・明にわたつて江南の文人文化として繁栄した。陸羽は、その源流を作つたものといえる。

「近世後期大坂両替商と茶の湯

—加島屋広岡久右衛門家の場合—」

倉林 重幸

本報告では、近世後期大坂における大規模な両替商が営んだ茶の湯の実態と特質を、加島屋広岡久右衛門家の史料に基づいて論じた。

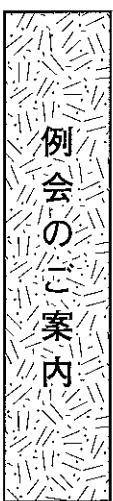
まず、当該時期における広岡家の主要な業務が大名貸と人替両替であることを述べ、次に「見立番付」「幕府御用金の賦課額」「勘定目録」の三点の分析を通し、当時の広岡家が鴻池屋善右衛門と比肩する豪商であつたことを明らかにした。

次に、史料の分析によつて近世後期広岡家における茶の湯について明らかにし得たのは以下の諸点である。

①当該時期の広岡家で茶道に傾倒したのは、

五代から九代の当主であり、特に八代は嘉永元年、表千家十代吸江斎から皆伝を受けた。

②天明元々三年にかけての茶道具購入は総計



例会のご案内

東京例会

一月二十五日(土)(会場:五島美術館)

午後二時

「江戸時代初期における茶陶の在り方について—光悦を中心に—」

砂澤 祐子
鈴木しおり

北陸例会

三月八日(土)

「未定」

未定

(内容が決まり次第、学会ホームページ
でお知らせします。)

高知例会

二月九日(日) (会場：高知県立文学館)

慶雲庵茶室 十時～

「石州三百ヶ条不白答(下) 常用文」

「これからの茶の湯」 柏井 武

茶席案内

開催予定日 高知新聞「こみゆつと」に掲示

時間 十時～十六時

場所 高知県立文学館 慶雲庵茶室

会費 三百円

に京都で開催する予定です。詳細は決まり次

第、ホームページ等にてお知らせいたします。

発表を希望される方は、八百字程度の要旨を

添えてお申し込み下さい。最終締切は一月末

ですが、予定人数に達した場合には、その時

点で締め切ります。詳しくは学会事務局まで

お問い合わせ下さい。

近畿例会発表者募集

近畿例会において研究発表を希望される方

は、八百字程度の要旨を添えてお申し込み下

さい。応募者多数の場合は、審査の上決定い

たします。詳しくは学会事務局まで問い合

わせ下さい。

新刊紹介

*『茶杓探訪』 西山松之助著 熊倉功夫編

宮帯出版社 定価三、六〇〇円(税別) 日

本文化史の泰斗西山松之助博士が全国の名

杓約二千本余を探訪し鮮明な写真と共に残

した鑑賞記録珠玉の一一一篇。

*『千一翁宗守 宗且の子に生まれて』 木津

宗詮著 宮帯出版社 定価三、二〇〇円(税

別) 養家吉岡家の家業の第一線で活躍し

つつ、父宗且を助けて千家隆盛に貢献した

一翁の生涯。

*『All about Rikyu』 今、日本人が学ぶべき

人一千利休』 淡交社編集局編集 淡交社

定価六三〇円(税込) 利休の茶、わびの心。

利休が求めた美のすがたとは。ほか

*年会費を未納の方は、同封しました払込用

紙にて至急お払い込み下さいますよう、よ

ろしくお願いいたします。



平成二十六年 大会発表者募集

平成二十六年の大会は六月十五日(日)

